

# 「四季・植物」 8 柊

学名 Osmanthus Heterophyllus P.S.Green  
モクセイ科の常緑小高木  
葉にトゲがあり、さわると痛いので「<sup>ヒヒラギ</sup>疼木」の意味から、この名がついた。「<sup>ヒヒラ</sup>疼ぐ」はヒリヒリ、ズキズキ痛むという意味である。

## 郷土資料から見た<sup>ひいらぎ</sup>柊のあれこれ

2月の節分には鬼を追い払うため、豆をまくとともに、焼いたイワシの頭を柊の枝に刺したものを門口に飾る風習が全国に見られる。柊はその鋭いトゲから「鬼の目突き」とも呼ばれ、鋭いトゲとイワシの悪臭が鬼を追い払うとされている。

また「寒中雪を消すという<sup>ようぼく</sup>陽木たる柊の枝をとって悪魔払いを」(「仏教行事歳時記」)するためという説もあり、「邪霊を寄せつけないような葉の刺や材のかたさなどから古来、呪力のある神聖な樹木とされ」(「日本民俗大辞典」)た木である。

クリスマスの飾りに使われる「ヒイラギ」は「ヒイラギモチ」というモチノキ科の常緑高木で、節分に使われる柊とは異なる。

柏崎には「まわり75cm、高さ4mを越す市内でも横綱級の大木」(「柏崎の名木」)と紹介された柊がある。西本町1丁目の種岡氏が所有するこの木は、昭和53年発行の同書で紹介されてから20年以上たった現在も健在である。

### 参考資料

「図説 樹と花の大辞典」	植物文化研究会・雅麗編	1996	「日本民俗大辞典」	吉川弘文館発行	2000
「日本大百科全書」	小学館発行	1994	「柏崎の名木」	柏崎植物友の会発行	1978
「仏教行事歳時記」	第一法規出版発行	1988			